

神谷 昇・長谷部 郁子

## 日本語のメトニミーと文中における生起位置の相関性について

### 1. はじめに

本稿では、「メトニミー（換喩）」と呼ばれる表現方法（以下、「メトニミー表現」と呼ぶ）について検討し、メトニミー表現の容認可能性が文中の生起位置に左右されることを指摘しつつ、その理由について認知言語学の観点から考察を行う。メトニミー（表現）は、山梨 (2000) では以下のように定義されている (Lakoff and Johnson (1980) や Lakoff (1987) なども参照)。

- (1) 日常言語のなかには、伝えようとする意味のすべてを言葉にしているのではなく、その一部にフォーカスをあてて表現し、他の部分は文脈によって補完していく簡略的な表現が広範にみられる。この種の表現のかかなりの部分は慣用化している。このタイプの表現のうち、近接関係の認知にもとづく慣用表現は一般にメトニミー（ないしは換喩）と呼ばれている。慣用的なメトニミーを特徴づける近接性の関係としては、〈容器—中身〉、〈主体—手段〉、〈作者—作品〉、〈材料—製品〉などの関係が具体例として考えられる。(山梨 (2000: 87))

それでは、(1) で言及されている「近接関係」とは具体的にどのようなものであろうか。例えば、山梨 (2000:87) は、「ひと皿を平らげる」のような表現を〈容器—中身〉の近接関係の例として挙げている。この例においては、「ひと皿」という容器の中身に相当する料理に焦点があたっていると言することができる。さらに、〈作者—作品〉の近接関係を表すメトニミー表現としては、「夏目漱石を読んだ」のような文が例として挙げられる。この例では、「夏目漱石」という作者が書いた作品が焦点化されている。

こうした「近接関係」は、Pustejovsky (1995: 76) において規定されているクオリア構造の4つの役割に類似している。(2) に示すのは、小野 (2005) におけるクオリア構造の定義である。

- (2) a. 構成クオリア (Constitutive Qualia) : 物体とそれを構成する部分の関係  
 b. 形式クオリア (Formal Qualia) : 物体を他の物体から識別する関係  
 c. 目的クオリア (Telic Qualia) : 物体の目的と機能  
 d. 主体クオリア (Agentive Qualia) : 物体の起源や発生に関する要因

(小野 (2005: 24))

上掲した「ひと皿を平らげる」のような〈容器—中身〉の近接関係は、物体（皿

のような容器)とそれを構成する部分(皿の中身の料理)の関係を表す(2a)の構成クオリアに、「夏日漱石を読んだ」のようなく作者—作品>の近接関係は、物体の起源に関する要因(作家が書いたことにより作品が完成した)を表す(2d)の主体クオリアにそれぞれ相当する。

しかし、メトニミー表現は常に容認可能であるとは限らず、(3b)のように容認可能性が下がる例がある。

- (3) a. ハンバーグステーキが昼に店に来た。  
 (発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客がおり、その常連客が昼食を食べに来たことを、店の従業員が他の従業員に伝えている。)
- b. ?? 店長がハンバーグステーキを注意した。  
 (発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客のマナーが悪いので、店長がその常連客を注意した。)

(3)において下線が付されている「ハンバーグステーキ」は、(2b)に示す「物体(ハンバーグステーキばかり注文する常連客)を他の物体(他の客)から識別する関係」を表す形式クオリアに相当する近接関係の認知にもとづくメトニミー表現である(なお、Dirven (1999)においても類似の英語の例が指摘されている)。このメトニミー表現は、(3a)のように動詞の主語位置に出現する場合は適格となるが、(3b)のように目的語位置に生起すると容認度が下がるように思われる。本稿では、第2節においてこのような容認性の差を詳細に検討し、第3節で、認知言語学の観点から、メトニミー表現の容認性の差について分析を提示する。第4節は本稿のまとめである。

## 2. メトニミー表現の容認可能性と文中の生起位置について

すでに第1節で述べたように、メトニミー表現の容認可能性がその生起位置によって下がる場合があり、本節ではその容認性を左右すると思われる要因を検討する。具体的には、メトニミー表現が2種類の動詞(自動詞と他動詞)の主語として生起する事例と、他動詞の目的語として生起する事例を以下で順に観察していく。

まず、「ハンバーグステーキ」というメトニミー表現が主語位置に生起している例である(4)を見てみよう。

- (4) a. 今月の期間限定メニューを食べて、ハンバーグステーキが喜んでいる。  
 (発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客が、店の期間限定メニューを注文した。)
- b. ハンバーグステーキが昼に店に来た。(=(3a))

- c. ハンバーグステーキが今月の限定メニューを注文した。  
(発話の状況：(4a)と同じ。)

(4a, b)では自動詞「喜ぶ」や「来る」の主語位置に、(4c)では他動詞「注文する」の主語位置にメトニミー表現が生起しているが、どれも適格な文であると考えられる。

次に、メトニミー表現が直接目的語位置に生起している例を検討する。(5)がその例である。なお、典型的には日本語の直接目的語は(5a)のように対格の「を」で標示されるが、主に状態動詞の直接目的語は(5b)のように主格の「が」で標示されることにも注意されたい。

- (5) a. ??店長がハンバーグステーキを注意した。(= (3b))  
b. #新人バイトはハンバーグステーキが嫌いだ。  
(発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客のマナーが悪いので、新人アルバイト従業員はその常連客を嫌っている。)

(5a)から明らかのように、直接目的語の位置にメトニミー表現が生起するとその容認可能性が下がるように思われる。同様に、(5b)は主格で標示された直接目的語の位置にメトニミー表現が用いられている例であるが、適切な文脈が欠如していると容認可能性が下がるように思われる(「#」は文脈により容認可能性が下がることを意味している。(5b)は「新人バイトはハンバーグステーキという料理が嫌いだ」のように「ハンバーグステーキ」がメトニミー表現と解釈されない文脈においては適格となる)。

また、与格の「に」で標示される「間接目的語」にメトニミー表現が生起することも許容されるようである。(6)を参照されたい。

- (6) 新人バイトがハンバーグステーキに水を持っていった。  
(発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客に、新人アルバイト従業員が水を持っていった。)

ここまでの観察結果をまとめると、おおむね、主語位置にメトニミー表現が生起することは許容されるのに対して、直接目的語位置にはメトニミー表現が生起しにくいことが明らかになった。そして、以下に示す例は、本稿での記述が妥当であることを支持するように思われる。まず、(5a)で指摘したように他動詞の直接目的語位置にメトニミー表現が生起することは難しいが、(7b)のような直接受身文においてメトニミー表現が主語位置に生起するようになると、容認可能性が高くなるように思われる。(7)と(8)の例を見られたい。

- (7) a. ??店長がハンバーグステーキを注意した。(=(5a))  
 b. ハンバーグステーキが店長に注意された。
- (8) a. #新人バイトはハンバーグステーキが嫌いだ。(=(5b))  
 b. ハンバーグステーキが新人バイトに嫌われている (こと)。

同様に、(9)に示されるように、間接受動文の主語位置にメトニミー表現が生起することも可能なようである。

- (9) ハンバーグステーキが新人バイトに水をこぼされた。  
 (発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客に、新人アルバイト従業員が水をこぼしてしまい、常連客が迷惑を被った。)

さらに、(10b, 11b)の対比から、下線が付されたメトニミー表現「夏目漱石」が主語に生起している自動詞「燃える」を「燃やす」のように他動詞化し、メトニミー表現を直接目的語の位置に置くと、自動詞の場合に比べ文の容認性が若干下がると感じる話者が存在する。

- (10) a. 火事で、書斎の古い夏目漱石の本が全て燃えた。  
 b. 火事で、書斎の古い夏目漱石が全て燃えた。
- (11) a. たき火で、書斎の古い夏目漱石の本を全て燃やした。  
 b. ?たき火で、書斎の古い夏目漱石を全て燃やした。

なお、埋め込み文の主語が対格で標示される場合には直接目的語の場合よりもメトニミー表現の容認可能性が高くなるようである。この事実は(12)に示されている。

- (12) あの店員はハンバーグステーキをうっとうしく思っている。  
 (発話の状況：飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客のマナーが悪いので、ある従業員はその常連客をうっとうしいと思っている。)

以上、本節ではメトニミー表現の生起位置とその容認可能性の関係性について検討し、主語にそれが生起する場合には容認可能であるが、直接目的語にそれが生起した場合には容認可能性が下がることを指摘した。次節では認知現言語学の観点から、メトニミー表現の文中の位置と容認可能性を左右する要因について議論する。

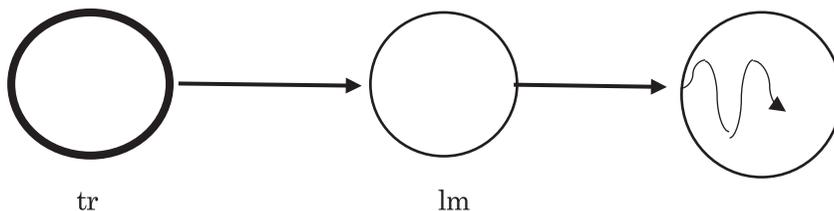
### 3. メトニミー表現とプロミネンス

本節では前節での観察結果を踏まえ、なぜ、メトニミー表現が主語位置に生起するとそれが直接目的語位置に生起したときよりも文の容認性が高まることあるのかについて認知言語学の観点から議論する。具体的には、メトニミー表現の生起位置とプロミネンス（際立ち）の度合いの関係性、および、メトニミーが許容されるのに必要な「ところ」のメカニズムが、上述の容認性の違いを説明にすることによって重要な役割を果たすと主張する。

最初に、認知言語学の枠組みにおいて、動詞の持つ項が文の主語や直接目的語として実現されるメカニズムについて概観する。例えば、(13a)の他動詞「燃やす」は、「燃やす」という動作を行う「動作主」（太郎）とその動作の対象である「主題」（本）を項に持つ。(13b)は動詞が持つイメージスキーマを図示したものである(Langacker (1987, 1991))。このイメージスキーマにおいては、この2つの項のプロミネンスが高められる、つまりプロファイルされるのだが、その中でも特にプロミネンスが高い動作主がトラジェクター (tr) となり文中の主語として、次にプロミネンスが高い主題がランドマーク (lm) となり直接目的語として実現される。

(13) a. 太郎が本を燃やした。

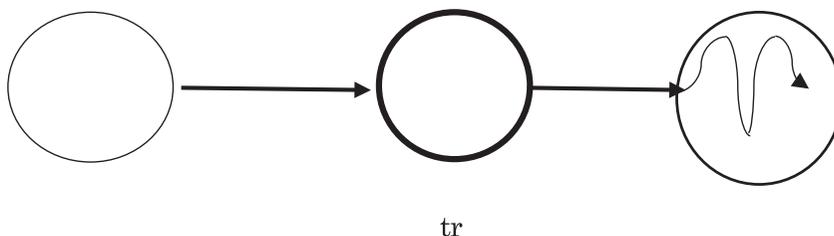
b.



(14a)のような直接受動文では、(14b)に示されるように、本来は高いプロミネンスを持っているはずの動作主が抑圧され、かわりに主題がプロファイルされる。そして、プロミネンスが最も高いトラジェクターとなった主題は、文中で主語として実現される。

(14) a. 本が燃やされた。

b.

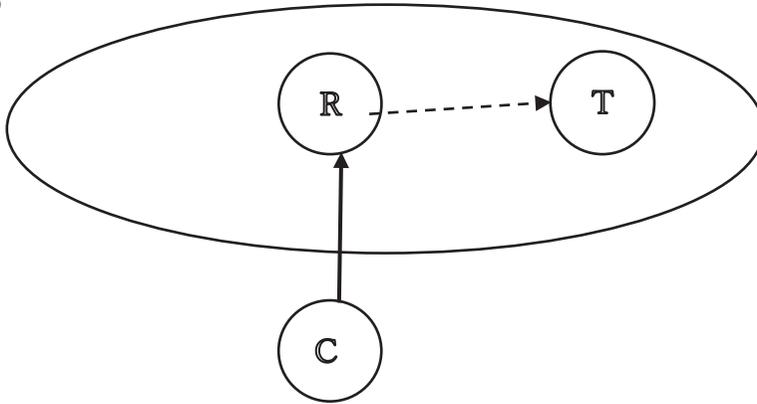


以上をまとめると、動詞のイメージスキーマの中でプロファイルの対象となり、その中でも特にプロミネンスが高い項が主語として文中で実現するという点が重要である。

次にメトニミーにかかわるメカニズムについて概観する。メトニミーとは、本稿の冒頭でも述べたように、「あるものの一部をフォーカスして表現する、近接関係に基づく慣用表現」だが、このことをイメージスキーマ化したものが(15b)の図である。(15b)のイメージスキーマが表しているのは、事態把握者(話者)が参照点(メトニミー表現においてフォーカスされる部分)にアクセスし、それを「目印」にして、その支配域内にある対象(メトニミー表現によって表される目標物)を指すという認知プロセスである(Langacker (1987, 1991))。例えば、(15a)では、夏目漱石という作家が参照点であり、それをもとにして、事態把握者は、下線を付されたメトニミー表現「夏目漱石」が「夏目漱石という作家が書いた本」という目標物を指すことを理解する。

(15) a. 私は昨日、夏目漱石を読んだ。

b



(C：事態把握者 R：参照点 T：目標物)

ところで、第1節では、メトニミー表現が表す近接関係は(2)に規定されるクオリア構造の4つの役割に類似していることを述べた。例えば、〈作者—作品〉の近接関係が、物体の起源に関する要因を表す(2d)の主体クオリアに相当するという議論が正しいとするならば、(15b)における認知メカニズムは、クオリア構造の4つの役割が規定している近接関係を通して物体(目標物)を認知するプロセスであると言える。

メトニミー表現がフォーカスする目標物の一部分は、参照点として機能するものであり、一定のプロミネンスを備えていなければならない。例えば、(15a)の例で参照点として機能している「夏目漱石」という作家は非常に有名な人物であり、

参照点として機能するために十分なプロミネンスを備えている。しかし、無名の新人作家のようにプロミネンスが十分でないと考えることが妥当であるものは参照点として機能することができず、よって、「無名の新人作家を読んだ」は「夏目漱石を読んだ」に比べ、メトニミー表現として成立しにくい。

また、メトニミーは慣用表現であるので、習慣的に繰り返して使用される表現であることが想定されている。言い換えると、メトニミーは、(15b)の認知プロセスが習慣的に繰り返されることによりクオリア構造が規定する4つの近接関係のどれかを表すようになるがゆえに成立する慣用表現である。さらに、ある表現が慣用表現として成り立つためには、事態把握者が参照点を通して目標物を認知するプロセスが適切なイベントスキーマ（山梨(1995: 182)）において行われていなければならない。例えば、「飲食店で常にハンバーグステーキばかりを注文する常連客」を表す「ハンバーグステーキ」というメトニミー表現が成立するにあたり、「ある常連客が来店の際にハンバーグステーキを注文する習慣」をフォーカスして従業員がその常連客を特別な存在として認知するプロセスには、「ハンバーグステーキを提供する飲食店」というイベントスキーマの設定が必要不可欠である。

ここまでの議論を踏まえて、前節で指摘したメトニミー表現の容認可能性について検討する。まず、(16)に再掲するように、動詞の主語位置に問題なくメトニミー表現が生起できるのは、上述したように、主語位置がプロミネンスの程度が最も高く、それゆえ、主語位置にある「ハンバーグステーキ」が参照点として機能するのに十分なプロミネンスを付与されているためである。

- (16) a. 今月の期間限定メニューを食べて、ハンバーグステーキが喜んでいる。  
 (=4a)  
 b. ハンバーグステーキが昼に店に来た。(=4b)  
 c. ハンバーグステーキが今月の限定メニューを注文した。(=4c)

一方、(17)に再掲するように、動詞の直接目的語位置にメトニミー表現が生起する場合、主語位置に生起する場合と比較すると容認度が低くなる事実を前節で指摘した。この容認度の低下は、直接目的語は主語に比較してプロミネンスの度合いが低く、したがって、「ハンバーグステーキ」が参照点として機能しうほどのプロミネンスを持たず、それをメトニミーとして解釈することが難しくなるためである。

- (17) a. ??店長がハンバーグステーキを注意した。(=7a)  
 b. #新人バイトはハンバーグステーキが嫌いだ。(=8a)

(18)に再掲する例においても、メトニミー表現がプロミネンスが低い目的語位置

に出現している (18b) は、それが主語位置に出現している (18a) よりも容認可能性が低下すると考える話者がいる (ただし、文中に「本が置かれている場所」というイベントスキーマを想起する語 (「書斎」) が存在し、この語が「夏目漱石」を参照点として目標物の「夏目漱石の書いた本」にアクセスするのを助けているので、話者によっては適格となる)。

- (18) a. 火事で、書斎の古い夏目漱石が全て燃えた。(=(10b))  
 b. ?たき火で、書斎の古い夏目漱石を全て燃やした。(=(11b))

(19) は、メトニミー表現が目的語位置に生起しているにも関わらず、どちらも適格である。

- (19) 夏目漱石を読む／ひと皿を平らげる。

「読む」や「平らげる」という表現に特徴的なのは、これらの動詞が表す行為が、「夏目漱石が書いた本」や「皿の中身の料理」というメトニミー表現の目標物が表す (2c) の目的クオリアに相当するということである。例えば、本という物体は誰かが読む目的で書かれ、料理は誰かが食べる (=平らげる) 目的で作られる。(19) は、目標物のクオリア構造内に含まれる行為を描写する動詞の存在が「夏目漱石」という作者が書いた本や「ひと皿」の中身の料理がフォーカスされることを手助けし、結果、容認度が高まった例である。本は誰かが燃やすために書かれたものではなく、料理は誰かが注意したり嫌ったりする目的で作られたものではないので、(17) や (18b) の容認度がこれらの動詞によって高まることはない。

(20a) に再掲する埋め込み文の主語位置にメトニミー表現が実現される例の許容度が高いのは、埋め込み文の主語位置に生起する要素は「思う」のような主動詞の直接目的語であると同時に、(20b) に示すように埋め込み文の述語の主語であり、後者のステータスがこの要素のプロミネンスを高めているためである。よって、(20a) では、「ハンバーグステーキ」が参照点として機能することが可能となる。

- (20) a. あの店員はハンバーグステーキをうっとうしく思っている。(=(12))  
 b. ハンバーグステーキがうっとうしい。

直接目的語位置においてメトニミー表現の出現が阻まれる事例をいくつか上で観察したが、(21) に再掲する例では、メトニミー表現が間接目的語位置に現れている。

- (21) 新人バイトがハンバーグステーキに水を持っていった。(=(6))

「持っていく」のような受け渡しの行為を表す動詞句は、「動作主」、「主題」、そして「受益者」の3項を持つが、これらの項は、文中において、それぞれ、主語、直接目的語、間接目的語として実現される。(21)における「新人バイト」のような動作主が高い主体性を持つのに対し、「水」のような主題には主体性が備わっていないが、主題を自ら受け取る受益者には主体性が備わっていると考えるのが妥当である。本稿では、この点において受益者は主題よりも動作主に性質が近く、主題よりも高いプロミネンスを持つので、直接目的語よりもプロミネンスが高い間接目的語(受益者)の位置にメトニミー表現が現れることができると主張する。

(22a)に再掲する例ではメトニミー表現が直接受身文の主語位置に、また、(22b)に再掲する例ではそれが間接受身文の主語位置に生起している。

- (22) a. ハンバーグステーキが店長に注意された。(=(7b) cf. (17a))  
 b. ハンバーグステーキが新人バイトに水をこぼされた。(=(9))

(7)で触れたように直接受身文の主語は対応する能動文の直接目的語であるが、プロミネンスの高い主語位置に実現されることにより、能動文の場合よりもメトニミー表現の容認度が高くなっている。間接受身文には対応する能動文が存在しないが、主語位置のプロミネンスが高いことに変わりはなく、さらに、間接受身文の主語位置には「習慣的特徴付け」がされている要素が実現されやすい(高見(1995: 59))ことを考慮すると、慣用表現であるメトニミーが間接受身文の主語位置に問題なく生起することは自然な帰結である。<sup>1</sup>

最後に、(23)に例示するように、メトニミー表現が動詞の付加詞として生起する場合、その容認度は付加詞が表す意味によって変わりうるについて触れておく。

- (23) a. ?昨日、夏目漱石で暇を潰した。 cf. 昨日、夏目漱石の本で暇を潰した。  
 b. 見慣れない2人の客がハンバーグステーキと食事をしている。

随意的な修飾要素である付加詞は、動詞の項に比べてプロミネンスが低いと考えられ、(23a)において「暇を潰す手段」を表す付加詞の位置にメトニミー表現が出現すると容認度が下がると感じる話者がいるのはそのためである。同じ付加詞位置であっても、(23b)でメトニミー表現が「主語の随伴者」を表す場合は容認度が高まるが、これは、動作主の随伴者のプロミネンスが、主語として実現する主体的な動作主によって引き上げられたことによるものと思われる。

#### 4. 結語

本稿では、「あるものの一部をフォーカスして表現する、近接関係に基づく慣用表現」であるメトニミーにかかわるメカニズムを認知言語学の道具立てを用いて提示し、プロミネンスという概念がメトニミー表現の許容度を大きく左右すると論じた。プロミネンスを決定する要因には生起位置、項や付加詞が表す意味、クオリア構造、特徴付けなど様々なものが存在するが、こうした要因の精緻な調査は、今後の研究課題としなければならない。

また、英語については、日本語の例とは異なり、(24)のように主語にメトニミー表現が生起する場合でも、(25)のように目的語にそれが生起する場合でも文法性に変化はなく、どちらもメトニミー表現として容認可能であるとの結果をわれわれのインフォーマントから得た。<sup>2</sup>

(24) The ham sandwich wants his coffee now. (Cruse (2011: 256))

(25) a. Our new face hates the ham sandwich.

b. Our manager complained about the ham sandwich.

上記のような日本語と英語の違いがなぜ生じるのかについても今後の検討課題としたい。

#### 謝辞

本稿を改稿するにあたり、査読者から大変に有益なコメントをいただいた。また、Martin E. Pauly 氏にはインフォーマントとして英語の例文の容認可能性の判断にご協力いただいた。ここに記して感謝する。なお、本稿における誤りはすべて筆者によるものである。

#### 注

1. 査読者は目的語位置にメトニミー表現が生起する (i) の例を指摘している。

(i) a. 新入生は、みんな夏目漱石が嫌いだ。

b. 夏は、みんなが水筒 (= お茶)を持ってくるように。

具体的には、(ia) では「夏目漱石」が目的語であり、かつ、「嫌いだ」という述語からは本が想起できないにもかかわらず、「夏目漱石」がメトニミー表現として容認可能であり、この点が本論の主張にとって問題となる。また、(ib) についても (ia) と同様に、「お茶」を意味する「水筒」が目的語位置に生じている例である。これらについては、以下のように考える。

まず、(ia) については、目的語が「が」で標示されていることにより、容認可能

性が高くなっていると思われる。つまり、名詞句が「が」格を伴うことにより、表面的には「主語」と同等の性質を帯びようになり、その結果、プロミネンスが高まり、「嫌いだ」のような本を想起しにくい述語であっても、メトニミーとして解釈が可能になると考えられる。

また、以上の説明が正しければ、「嫌いだ」のように本を想起しにくい述語においては、「を」格で目的語を標示すればメトニミー表現の容認可能性が落ちることが予測される。そして、この予測は以下の (ii) から、正しいと考えられる。

(ii) # 新入生はみんな夏目漱石を嫌っている。

「嫌っている」からは夏目漱石の書いた本を想起しにくいため、適切な文脈なしでは (ii) の「夏目漱石」は「夏目漱石という人物」を指すのが自然な解釈である。さらに、(ii) を受動文にし、「夏目漱石」を主語位置に置くとプロミネンスが高まり、それがメトニミー表現として解釈できるようになる。(iii) を参照されたい。

(iii) 夏目漱石が新入生みんなに嫌われている。

次に、(ib) についてであるが、この例の容認性には状況の認識にかかわる認知フレームが関与しているように思われる。つまり、遠足の持ち物を確認しているような状況では、「お茶」が持ち物の1つとして想起されるために、それを入れるための容器である「水筒」が「お茶」を指すことができると考えられる。ただし、どのような条件のもとでフレームが関与して目的語のメトニミー表現の容認性が高まるのかについては今後の検討課題とする。

なお、本文中の (5b) で「嫌い」を用いた例（以下に (iva) として再掲）を提示し、それがメトニミー表現として解釈することが難しいことを指摘したが、査読者が指摘した (i) の例（以下に (ivb) として再掲）では (iva) と同一の述語を用いているにもかかわらず容認可能である。

(iv) a. # 新人バイトはハンバーグステーキが嫌いだ。  
b. 新入生は、みんな夏目漱石が嫌いだ。

この事実については、以下のように考える。まず、「夏目漱石」というメトニミー表現が表す〈作者－作品〉の近接関係は主体クオリアに相当する。それに対して、ハンバーグステーキというメトニミー表現が表す「物体（ハンバーグステーキばかり注文する常連客）」を他の物体（他の客）から識別するという近接関係は形式クオリアに相当するが、この関係は飲食店という特殊なフレームでのみ成立するものである。本論では特殊なフレームを想起する必要があるメトニミー表現より

もそのようなフレームを想起しなくとも解釈できるメトニミー表現の方が容認度があがると考える。よって、(iva) の許容度が (ivb) に比べて下がっているのはこのことに起因すると思われる。

2. (24)、および (25) の例については、査読者によって指摘されたものである。

#### 参照文献

- Cruse, A. (2011) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics* (third edition), Oxford University Press.
- Dirven, R. (1999) "Conversion as a Conceptual Metonymy of Event Schemata," *Metonymy in Language and Thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden, 275-287, John Benjamins.
- Lakoff, G. P. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. P. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*, Stanford University Press.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』、くろしお出版.
- Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較：受身文、後置文の分析』、くろしお出版.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』、ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版.